

第七節 滿洲事変前後の長崎医科大学

昭和四年六月十日、拓務省が新設され、東部アジアに對する施策が行われていた後、翌五年四月二十二日にはロンドン海軍条約の調印に参加した政府は、昭和六年九月十八日、柳条溝に起った事件に端を發して滿洲における軍部革新派が張作霖・張學良等を打倒して滿洲資源を確保すべく、行動を開始したのを機として、翌七年に至り、滿洲国を独立させたのである。この頃の衛生行政は昭和四年三月十九日、学校医・幼稚園医及び青年訓練所医令が制定され、同月三十日、政府直扱いの入院診療報酬が日本医師会に還元された。四月一日、医師・歯科医師・薬剤師の試験事務が文部省より内務省に移され、更に国防に備えて、翌二日、救護法が公布された。又、六月二十日には国需産業の衛生管理の意義をも含めた工場危害予防及衛生規則が制定された。そして八月一日には健康保険事務が社会局から地方庁に移管され、道庁出張

所も設けられた。十月二十九日、学校看護婦に関する訓令が發せられて、三月の学校医制度の整備に應じたが、翌五年三月には、保健衛生調査会の民族衛生に関する特別委員会で、断種法の調査研究が進められ、五月六日には日本學術振興会は政府に對し、国民体力管理に関する建議をなした。同月十九日、麻薬取締規則、有害避妊用器具取締規則が制定され、同月中に、薬学振興会が設置され、十一月二十日には癩療養所が拡張されることとなった。又、この年、内務省に国立公園調査会が設置され、長崎県立公園雲仙もその対象として検討されることとなったのである。このように、滿洲事変の起る直前まで、種々問題とされ、法則に規定されて行つたのは、麻薬・保健・衛生關係が主で、国立公園の問題が取上げられたのはアメリカに遅れること五十年ばかりであった。このような社会變動の中に、本学では、次第に外地より入学

して来る者が多くなって来たが、次に昭和四・五年の本学を顧みよう。

昭和四年二月、長崎医科大学附属医院における産婆看護婦の養成機構を整え、同年四月一日より「長崎医科大学附属医院産婆看護婦養成所規則」が施行された。又、この頃より本学附属医院内には美瓊会と称する産婆及び看護婦の会則が定められ、会員の親和協力と、その素質の修養を加え、更に品位の向上を図られるようになってくる。

二月十五日、教授阿部俊男は学生主事の兼任を命ぜられ、同月、本学解剖学教室附属動物室等の新築が竣工した。

さて、経済恐慌によって授業料増額の要は遂に三月十九日に行われた。即ち、本学々則第三十七条中、授業料の額を百式拾円に、附属薬学専門部規則第三十八条中、授業料の額を八拾円に改め、何れも昭和四年度入学生よりこれを適用することとした。同月三十日、附属薬学専門部温室の新築が竣工した。

四月一日、教授赤松宗二は願により附属図書館長を免ぜられ、同日、教授緒方大象は附属図書館長に補せられた。

この日、高等学校高等理科卒業者六十四名及び中華民国人四名（特別）に対し、入学を許可し、同月十五日より授業を開始した。

同月十二日、西彼杵郡野母村より出願の本学臨海実験所用地千八百十坪並びに建物五十三坪寄附受領の件について文部大臣の認可があった。同月三十日、教授浅沼武夫は願に依り附属医院長を免ぜられ、同日、教授古屋野宏平は附属医院長に補せられた。又、この月、御影並びに勅語及び詔書謄本奉置の通牒が学部部長から発せられたが、この件については同じく学部部長から昭和七年七月「御真影奉安に関する件」が発せられ、更に昭和十一年四月二日の通牒で「御影奉安施設ノ完備方ニ関スル件」が発せられた。皇国の御民としての教育方針は終戦に至るまで続けられて行くのである。

そして、文部次官通牒により文部省直轄学校外国人特

第七節 満洲事変前後の長崎医科大学

別入学規程を台湾人若くは朝鮮人に準用の件を削除した。五月十七日、本学々則学科時間配当表中、随意科として栄養学科を加えた。当時の栄養学科は特殊なものとして知られ、栄養内科は当時助教影浦尚視が担当し、他の内科は交代で外来を受持っていたが、このみ毎日外来を行った。

六月、附属医院産婦人科病棟並びに伝染病棟等の新築が竣工したが、七月十七日には附属医院において、防火演習を行った。

十月二日、神宮式年遷宮が執行されたので、同日、奉拝式を挙行した。

十二月十五日、本学附属野母臨海実験所落成式が同所で挙行され、水産動物の組織学的研究が進められたのである。

同月十七日、勅令第三百五十七号を以て、官立医科大学官制職員定員表中、書記の項が改正された。

昭和五年（一九三〇年）一月二十四日、文部省では、「紀元節挙行事項ニ関スル件」の訓令を發し、「宏遠雄大

ナル建国精神ヲ深カラシメ以テ国民精神ノ振作ヲ図ルハ極メテ機宜ニ適ヘル措置ト被存候而シテ今ヤ我国各般ノ情勢ハ国民ノ自覚猛省ヲ促スコト愈々大ナルモノ有之ト相信シ候ニ就テハ同日ヲ期シ各府各種団体協議ノ上建国祭、講演会、野外演習、遙拝、国旗掲揚式、登山或ハボスター、リーフレット配布等其ノ地方ニ適切ナル施設計画ヲ樹テラレ以テ国体觀念ノ涵養ト国民精神ノ作興トニ一層御留意相成度」と云つてある。このような思想は全体主義への歩み寄りを近付かしめて行くのであるが、その發展の跡は明らかに誤つたものと云わねばならないにしても、歴史的な過程としては又止むを得ないものであったと考えられる。これは全く政治に支配されて行く学校教育の末路に外ならない。

六月に至り、本学細菌学研究室の移転増築、解剖学教室附属骨晒室並びに薬物学教室附属蛙池等の新設及び附属医院内臨床講義室並びに外科病棟、その他、婦人科・眼科・小児科・精神科・高南・高北の各病棟を連絡する渡廊下の新築が竣工した。

七月十八日、朝より稀有の大暴風雨が来たため、本学会議室木造二階建七十坪、学生控所木造平家建六十坪、同附属便所六坪、附属医院小児科病棟日光浴室木造平家建九坪、野母臨海実験所木造平家建五十三坪の各一棟全部が倒潰し、附属薬学専門部実習室木造平家建四十八坪一棟が半潰し、その他、各教室及び附属医院とも多少の損害を蒙った。

十一月四日、勅令第二百十三号を以て、官立医科大学官制が改正され、職員表中、新に技手二人が置かれた。

十二日を以て、本学創立八周年を迎えたので、当日、十時より大学講堂で創立記念式を挙行し、林学長は本学の歴史を語り、式辞をなし、大学の万才を三唱して閉会したが、引続き、長崎図書館長永山時英の「蘭医シーボルトと日本」の講演があり、二時間後に散会した。

なお、この昭和五年には旧細菌学教室跡地に環境衛生研究室としてわが国最初の暖冷房装置を備えた鉄筋コンクリート平家建、緑色のスレート屋根葺の新築工事（約六十坪）が完成した。

第九章 長崎医科大学

昭和六年（一九三一年）は満洲事変の起った年である。産業資本主義・帝国主義の勃興は軍国主義の発展と共にわが国の発達に大きな障害を来していた。長崎医科大学の破綻もこの頃から萌すところがあった。災厄は何れの場合にも同じ頃に起るものである。利害得失をのみ追う時には必ず感情的対立をも含み、然も正邪の区別を明らかにしようとして遮二無二な方法をとろうするのであり、一方的な意見だけを述べ立てて、他の言分は全く聞こうとしない。日本と中国との交渉の破綻も、戦争を企てようとする一部の人々によって煽動と中傷に追い込んで、益々複雑な様相を呈せしめ、懷疑とお互いの不幸を導入するようになるのである。

さて、衛生行政は二月二十四日、阿片委員会官制の制定、三月八日のらい予防協会の設立、四月一日の国立公園の公布（十月一日より施行）があり、この国立公園委員会の設置もあった。同月二日、労働者災害扶助法及び労働者災害扶助責任保険法の公布、頼予防法及び寄生虫病予防法の公布、六月二十三日の学校歯科医及び幼稚園

第七節 満洲事変前後の長崎医科大学

歯科医令の公布などがあり、七月十三日には麻薬の製造制限及び分配取締に関する条約締結、十一月二十七日、阿片吸飲防止に関する協定、同月、健康保険歯科診療方針を定め、十二月十七日には簡易水道布設助成規則を制定した。このように、歯科及び麻薬関係法規が種々行われるようになったのであるが、この年の本校の略史は次の通りである。

一月三十一日、教授兼学生主事阿部俊男は願により兼任学生主事を免ぜられ、同日、教授富田雅次は学生主事の兼任を命ぜられた。

二月五日、天皇・皇后両陛下の御真影を奉還し、新たに天皇・皇后両陛下の御真影を下賜された。そこで、同月七日、その奉戴式を行った。

昭和六年度より、大学生の募集人員六十名を八十名に増加した。三月三十一日、学生主事兼助教授北条春光は願により本官を免ぜられ、助教授山根浩は学生主事兼助教授に任ぜられた。五月二十七日、勅令第九十九号を以て、高等官官等俸給令中の改正、勅令第百号を以て、判

任官俸給令中の改正、勅令第百七号を以て官立大学教官の職務俸に関する件中の改正があった。

六月、本学配電室の新営並びに構内配線工事、及び衛生学教室所属実習室、同研究室の新営、附属図書館事務室の増築模様替、及び附属医院外科病棟の残工事、耳鼻咽喉科病棟の改築、給水装置の新営、西二病棟の内一部を産婦人科病棟並びにラジウム室に移転する工事等が竣工し、十一月には法医学教室所属実習室、十二月には野母臨海実験所の復旧工事が竣工した。このように長崎医科大学の施設は次々と整備されて行き、長崎医学の殿堂が築かれて来た。そして、こうした施設の拡充は自ら研究への熱意を盛り上らせて来たのである。

なお、十月一日には、長崎医學會（代表は菊池循一）より同会奨学資金の寄附が行われた。

昭和七年（一九三二年）一月二十八日、上海事変が起り、二月二日には國際連盟が日中問題を討議した。そして五・一五事件が起り、九月十五日には日滿議定書の調印が行われ、満洲国を承認した。これは次の日華事変の前段

階であつた。一方、衛生行政は一月一日、救護法が施行され、二月一日には学校医の職務規程及び学校歯科医職務規程が定められ、二十四日には公立健康相談所設置について通知した。六月二十五日、第五改正日本薬局方を制定し、七月二十二日、売薬部外品取締規則を制定した。又、八月一日には寄生虫病予防法の施行があり、九月七日には文部省は学校給食に關して訓令を發した。

この年の本学は一月に小児科日光浴室、三月には附属医院内科病棟が竣工し、又、本学学生控所の復旧工事が竣成した。全く前年に引續いて行われた工事であつた。

三月二十日、長崎医学同窓会の会則が制定され、本学出身者の力によって、母校の發展を図られることとなった。同月二十八日、本学事務官山本董は願により本官を免ぜられ、四月一日には教授古屋宏平は願により附属医院院長を免ぜられ、後任として教授勝矢信司は附属医院長に補せられた。同日、附属薬学専門部教授高島清は願により同部主事を免ぜられ、同日、同部教授川上登喜二は附属薬学専門部主事に補せられた。同三十日、附属薬学専

門部教授兼長崎医科大学学生主事大倉東一は願により兼官を免ぜられ、同日、同部教授末次又二は長崎医科大学学生主事に兼任を命ぜられた。三月、解剖組織実習室の増築及び学生控所の新営、附属医院内科病室の一部の新営、内科診療所附属便所渡廊下の移転工事等が竣工した。

四月十日、本学学則中、薬物学を薬理学に改め、同日、附属薬学専門部規則中、第八章卒業試験及び卒業成績等に関する条項及び第十章において、徴兵令を兵役法に改めた。五月二日、文部属須田機策は本学事務官に任ぜられた。十一月二日、文官普通分限委員会を置いた。十二月二十七日、勅令第三百九十一号を以て、官立大学官制定員表中、助教授、助手、書記、薬剤手、看護長の項を改正し、何れも減少せしめた。この年末、長崎医科大学事件が起つた。種々の見方はあるであろうが、問題の發生は学問に対する尊敬さを失う一部の人々の行動と、ある条件を示した單なる噂だけを信用し、他に何等の根拠のない人にまで迷惑をかける結果に終つたのであるが、悪意の人は投書や侮告にのみ走り勝ちであつて、本来の

第七節 満洲事変前後の長崎医科大学

學術の振興を忘却し去るのである。池魚の災ほど、忌わしい歴史はないであらうし、派閥をのみ事とする人々の嫌味しか残らなかったのである。

昭和八年（一九三三年）一月三十一日、教授兼学生主事富田雅次は願により兼任学生主事を免ぜられ、教授浅沼武夫は学生主事の兼任を命ぜられた。三月二十五日、本学長兼教授林郁彦は願により学長を免ぜられ、教授に専任となり、教授小室要は本学長兼教授に任ぜられた。同月三十一日、附属薬学専門部規則第八章中、卒業試験及び卒業受験料の項を削除し、授業料を増額し、第三学年成績の、及落を判定することとし、その他関係条項の一部を改正した。同月、臨床講義室、内科病棟の残部、中央廊下、病理学教室附属研究材料保存室、同教室附属小使室及び便所の移転工事等が竣工した。

四月一日、教授緒方大象は願により附属図書館長を免ぜられ、教授竹内清は附属図書館長に補せられた。七月三日に至り、長崎医科大学附属図書館規程施行細則と本学附属野母臨海実験所規則が制定された。

八月二十三日、附属薬学専門部教授兼学生主事末次又二は願により兼任学生主事を免ぜられ、同部教授深川友吉は学生主事の兼任を命ぜられた。そして九月一日、長崎医科大学陸会が発足し、大学本部、附属医院及び薬学専門部の事務職員協議会が持たれるようになった。

十二月二十二日、附属医院長教授勝矢信司は休職を命ぜられ、教授高瀬清は附属医院長事務取扱を命ぜられた。同月二十七日、附属医院は産婆看護婦養成所規則第十七条中、入学志願者は受験料金五拾銭を納入することを追加し、尚入学願書式及びその他の条項において、一部を改正した。この年、漸く前年の事件の落着をみた。

昭和九年（一九三四年）は漸く安定した大学が綱紀を引締め、再建に努力していたのであるが、衛生行政では、三月十六日、昭和六年の国立公園法により、雲仙が瀬戸内海及び霧島と共に三国立公園に指定された。同月二十四日、傷兵院法が公布され、十月には健康保険相談所が設けられるところがあった。

この年、本学では、二月二十四日、本学長兼教授小室

要は願により本官並びに兼官を免ぜられ、九州帝国大学名誉教授高山正雄は本学長に任ぜられた。三月八日、教授高瀬清は、附属医院長に補せられた。三月二十九日、長崎医科大学専攻生規程が許可されたが、同月、生理学教室附属講義室、銃器庫、事務官官舎並びに附属医院整形外科病棟、臨床講義室、中央廊下の一室、耳鼻咽喉科病棟の渡廊下、第一機関室附属煙突一基の新築及び精神科診療室、同渡廊下の移築が竣工した。四月一日、先に許可されていた長崎医科大学専攻生規程を制定した。

八月三十一日、教授兼学生主事浅沼武夫は願により本官並びに兼官を免ぜられた。十月四日、教授北条春光は学生主事に兼任を命ぜられた。同月十二日、附属薬学専門部規則第六条中、学期期間を改正し、昭和十年四月一日より実施した。同月二十二日、附属医院諸料金規程を制定した。同月三十一日、本学専攻生規程第四条中、入学資格者の項を改正した。同月、解剖学実習室、馬車及び自動車兼用埋込秤及び同上家屋の新築が竣工した。

こうして、数年来の学内問題は整頓されることとなり、

授業も正常化し、本来の大学としての機構の不備もその人的構成の充実によって解決した。教授が学生を愚弄し、学問の尊厳を傷けるような言動を行なっていた悪弊は一部の教授ではあったにしても努めて避けられるべきで、現代においても常に反省されねばならないところであろう。即ち大学教授が社会の指導的立場にある以上、高い識見が要請せられ、徒らに権力のみによって物事を解決しようとする方法には傾くべきではないであろう。この大学で起った問題は当時、広く一般に知られたところであるが、新任学長高山正雄はそうした法的问题と学内の肅正に尽力するところがあつたものである。